
乙女の涙は悪魔も倒す？

ツダヨシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女の涙は悪魔も倒す？

【Nコード】

N8535U

【作者名】

ツダヨシ

【あらすじ】

この春から、短大生となった水谷愛香は、女手一つで育ててくれた母を、少しでも助けるために、一人暮らしを決意した。

——大丈夫、きっと自分は頑張れる！と気合いだけは十分だった彼女。でも、現実は甘くない……。それでも健気に頑張る愛香の前に、現れたのは——傲慢・鬼畜な、悪魔のような男だった。

プロローグ（前書き）

お話の中で、暴力的なシーンが出てくる予定です。どうしても外せそうにないため、苦手な方は注意してくださいね。

プロローグ

夜道、といつても街灯や建物から、漏れ出る明かりのおかげで、全く暗くない舗装された道を少女は歩いていった。周りには高層ビルが幾つも立ち並び、多くの人々が忙しなく行き交っている。

彼女が手にしているのは、目的地の地図が記された白い紙。目印を一つ一つ確認しながら、人混みの中を進んで行く。ボールペンで丁寧に描かれた道に、付け加えられた赤い矢印は、少女の目指すべきゴールが近いことを示していた。

「もうすぐだ」

指示されている通り、十字路を左に曲がった。

——表通りとは違い、静かな景色の中、その建物は堂々と存在感を示しながら建っていた。

若干ビクつきながらも、何とか、少女は入り口まで辿り着く。無駄な外装は一切なく、黒く艶のあるドアに、貼り付けられた金色のプレートには店名のみが記されていた。適度に押さえられた照明の具合といい、全体的に高級感が漂ってくる。

そんな陳腐な感想しか出てこないこと自体が、自分には縁のない場所だと再認識させるようだ。一度、触れたドアノブから手を離し、少女は、じりつと一歩後ずさる。

（やっぱり、止めようかな。他にも方法があるかもしれない……）
帰ろうと、踵を返しかけた彼女の頭の中に浮かんできたのは、今月分の光熱費やその他諸々の請求書。

「や、やっぱり駄目！ 私には、選ぶ権利なんて無いのよ」
ぐつと拳を握り、覚悟を決めた少女は、もう一度、ドアノブへと手を伸ばす。

ふと、自分のことを心底心配してくれていた、二人の顔が彼女の

目の前にチラついた。

（これは、別に危ないことじゃないし……あの子たちなら、分かってくれるよね）

後ろめたさを、その胸の内に感じながらも、少女はゆっくりとドアを開いた。

一人暮らしをする理由

「姉ちゃん、本当に行っちゃうんだな」

他の人では、なかなか見分けることの出来ない、良く似た二つの顔が、暗く沈んだ表情を浮かべていることに気付いた、水谷愛香は、みずたにあいかぶつと小さく吹き出し、作業中の手を止めた。

「ちよつと、なーに、しんみりしちゃってるのよ！ 一人暮らし始めるだけじゃない」

この春から短大生になる愛香が、家族の下を離れ、一人暮らしを始めると宣言して一ヶ月。引越しをする日まで、いよいよ残すところ、あと三日となっていた。十二年間過ごしてきた、彼女の部屋の中は、今や段ボールの山が積み重なっている。

あとはゴミ捨てだけね、と部屋をどんどんと片付けて行く姉に、弟たちは口々に言葉を投げ掛けた。

「姉ちゃんが、一人で暮らすなんて、俺……すっごく心配だよ」

「俺も、俺も。だってさあ、どっか抜けてんだもん、姉ちゃん」

「質が悪いセールスマンが来たらどうするの？ 姉ちゃんじゃ、きつと断れないよ」

「高い物売り付けられて、泣き寝入りしても良いの？」

「爺ちゃんも、婆ちゃんも、本当は悲しがつてるのに……」

「そーだよ、寂しい思いをさせるなんて、長女としてどうなのさ！」

キーキーと、好き勝手に喚き散らす二人に、愛香はズキズキと痛み出した頭を抱え、溜め息をついた。

「あのねえ、私だって、要らないものは要らないって言えるし。あ 彰あ人と、雅人まことが心配してくれるのは、嬉しいけど大丈夫だから。それに……引越すたって、ここから、たった一時間ぐらいしか離れないからね」

と呆れ顔で言う姉に対し、彰人がびしりつと指を突きつけ、声を上げた。

「そう、そこなんだよ！」

「な、何よ？」

「遠すぎる短大に行くわけでもないのに、どうして家を離れるのさ？」

「彰人の言う通りだよ、ここからでも通えるじゃん」

ずいっと、二人の険しく歪んだ顔が近付いて来て、愛香は慌てて後ずさる。

「と、遠い所よりも、近い方がいろいろと便利でしょう？」

「本当に、それだけ？ ……何か隠してるでしょ、俺たちに」

幾分低く抑えられた彰人の声色――

暑くもないのに、愛香はつつつと顔に汗が伝うのを感じた。

「あ――、ゴミ袋取って来なくちゃっ」と立ち上がり、部屋を出ようとしたが、じろりと四つの瞳に睨まれ断念する。何故か、座り直して、あるうことが正座をしてしまっている自分。

（どうして、姉である私がこんな状態なのよ！）

悔しくなるが、彼らの放つ空気が、目に見えない冷気を纏っていて怖いのだ。

重々しい沈黙が、肌に突き刺さるようで、痛い。息苦しい、堪え切れない――愛香は、渋々と口を開いた。

「だって……」

彰人と雅人は、一言も聞き逃さぬようにしているのか、物音一つ立てず、真剣な表情でこちらを見つめている。二人の視線から逃れたくて、愛香は下を向いた。

「だって……今年で、彰人も雅人も、高三になるじゃない」

「はあ？ なに、その理由…意味が分かんないよ？」

自分たちの、学年が一年ごとに、一つ上がる。当り前のことではないか。姉が家を出るということと、何の関係があるのだと、弟たちは納得がいかず、唇をとがらせた。

「だから、その、一年後には大学生でしょ？」

ぐつと顔を上げた愛香は、彰人と雅人へ交互に目を向ける。

「三人分の面倒は、さすがの母さんでも…きつい…のかなって」

祖父や祖母の力を借りながら、別れた父の代わりに働き続けている母。本当は、すぐにでも就職して自立すべきだと思ったのだが、夢を諦め切れなかった。

「短大に行くのは、私の我が儘だから、学費は自分で出そうと思って」

バイトしながら通うには、やっぱり学校に近い方が良いかなと思っ
ったの――

姉の告白に、はっと息をのんだ彰人と雅人は、俯き押し黙ってしまっ
った。

（やっぱり、言わない方が良かったかも……）

どんよりとした空気が辺りに漂い、恐ろしいほどに彼らのテンシ
ョンが下がっている。

「もう、暗くなりすぎ!」

愛香は、項垂れている二つの頭を軽く小突いた。見上げてくる彰
人と雅人の瞳を見つめ、言い聞かせるように彼女は語る。

「大丈夫よ、心配しないで。私が身体だけは丈夫なこと、二人は良
く知っているでしょう?」

うんと、素直に首を縦に振った弟たちに、愛香はにっこりと微笑
んだ。

「いつでも帰って来られるとは限らないから、私の代わりに、母さ
んたちのことよろしくね。迷惑掛けちゃ駄目よ!ちゃんと、手伝
い
も――」

「分かってるよ、俺らだって母さんのこと大事なんだから」

「それより、姉ちゃんこそ、無理しちゃ駄目だからな」

「分かってるわよ。ありがとう」

（良かった、認めてくれたみたい）

照れているのか、仏頂面で呟かれた雅人の言葉に、愛香は、ゆる

りと息を吐き出し、胸を撫で下ろす。

そうだ、と何かを思いついたようで、弟たちは顔を見合わせ頷き合うと、姉へと向き直った。

「「お金が欲しいからって、おじさんとかと遊ぶなよ！」」

真顔で忠告されて、愛香は一瞬声を失う。

「す、するわけないでしょ——！！」

彼女の叫び声とともに、怒りの鉄拳が、彰人と雅人に襲い掛かったのは、言うまでもない。

一人暮らしをする理由（後書き）

ちよつと、長い文章になってしまいました。 > (| |) <
誤字、脱字、ご意見、ご感想がありましたら、お知らせくださいね。

甘くない現実

——きつと、自分なら頑張れる。そう思っていた——
でも現実はその甘くは無く、零れるのは溜め息だらけ。

なかなか上手く行かない生活に、正直、愛香は焦っていた。
学費だけで精一杯だったのに、デザインを学ぶうえで、必要な道具や資料を集めるためにも、お金が必要となり、母から受け取っている生活費だけでは、どうも間に合わなくなってきたのだ。
バイトを増やそうにも、課題に追われ、並みの時給で掛け持ちするような時間は取れそうにない。お金は欲しい、てか無いと駄目だ。
でも、家族には言い出せずにいる。

（ただでさえ頑張ってくれてるのに、これ以上は頼れないよ）
そんな悩みで頭が回らなくなっていた愛香に、気の良いバイト仲間が教えてくれたのは一件のオアシスギル話。

——『花桜』ってお店なんだけど、すごく時給が良いらしいよ。
学生が雇ってもらえるか分からないけど、一度訪ねてみたら？
八方ふさがりの闇の中、愛香は一筋の光が見えた気がした。

「愛香ちゃん、今日もお客様方のご案内、宜しく頼むわね」

「はいっ！ 任せてください」

幅広い台の上に広げられている用紙を、一纏めに整理していた愛香へと声が掛けられた。話しかけてきたのは、『花桜』のオーナー、鈴恵ママ。白い肌に良く映える、黒地に美しい花々が描かれた着物を、身に纏った品の良い女性である。

「ふふっ。元気な貴方が居るだけで、店の入り口が明るくなるわね」

「そ、そんなことないですよ」

鈴恵の艶のある、色っぽい顔に微笑まれ、気恥しくなった愛香は下を向く。

（本当に、綺麗だな）

従業員に呼ばれ、離れて行った彼女の艶やかな後ろ姿に、愛香の唇からほつつと溜め息が漏れ出た。

『花桜』——会員制の高級クラブで、既に登録している客からの紹介が無ければ、立ち入ることが出来ない。

一階は、お洒落なバーで、色も形も様々な酒瓶が、センス良く棚に飾られている。

二階は、ホステスと客人が、現実や時間を忘れて語らう空間となっていて、毎晩のように、楽しい笑い声で満ちていた。最上階である三階は、オーナーと一部の従業員しか立ち入ることの許されない完全個室のプライベート・ルーム。部屋の設備が、防音となっているため、お偉い様方の秘密裏の話し合いの場として、使用されているらしい。

（まさか、本当に雇ってもらえるとは思わなかったな）

自分には縁遠いと思っていた、煌びやかな夜の世界へと、愛香が奇跡的に雇われて、もう二週間が経とうとしていた。

他の従業員が難色を示す中、鈴恵の一言で採用が決まったのだ。

「良いじゃない、この子、困っているみたいだし。受付として働いてもらいましょうよ」

華が無いだの、子供っぽいだの、散々愛香の容姿に付いて駄目出しをしていた彼らも、オーナーの意見には逆らえず、頷くしかなかった。

フロアの責任者から『使えなければ、追い出します宣言』を受けてしまい、愛香は死ぬ気で頑張った。顧客リストに貼り付けられた同じように見える顔写真を、どうにかそれぞれの特徴を探し出して片っ端から覚え、仕事内容では無かったフロアの掃除も、自ら

率先して手伝った。

（辞めさせられるなんて、絶対、嫌だ！）

貧乏学生に、気の良い神様が与えてくれた最高の職場なのだ、簡単に奪われるわけにはいかない。それらの努力が実ったのか、多くの従業員に認められ、今日も受付嬢としての仕事が始まる。

――PM9：00、『花桜』に灯りが点った。

最悪な出会い

「上の階、今日は凄く賑やかですね……」

顧客名簿をせつせと書き写していた愛香は、二階から響いてきた笑い声に驚き思わず手を止めた。ちらりと隣を見れば、同じ受付係である田村がその顔に苦笑を浮かべている。

「あ——、藤田さんがいらっしやっているからね」

「フジタ不動産の？」

「そつ。社長じゃなくて、息子の方だけど。ここだけの話さ……」
周りに他の客が居ないことを確認し、一応声のボリュームを落として、田村は話を続ける。

「酒癖が悪くて、すぐ手を出すって有名なんだよ。ホステスの何人かが、被害にあってるらしいんだ」

「そつ、なんですか」

「まあ、親の敷いたレールの上を走ってるだけじゃ、つまらないんだろうけどさ。もう少し自重して欲しいもんだよな」

確かに彼の言う通りなのだが、お客様の悪口は控えたい。

良い大人なんだからと、呆れたように語る田村に、愛香は曖昧に頷いてみせた。

「つと。話してたら、わざわざご登場だ」

田村の声に促されるように、ついつと視線をフロアへ向けると丁度階段から下りてくる藤田が見えた。顔は赤く、足元はふらつき、何とも覚束ない——

そのまま、ラウンジに続く廊下へとその姿が消えて行く。

「大丈夫ですかね？　かなり、お飲みになられてるみたいなんですけど」

「少し休みに行くつもりじゃない？　大丈夫だって」

心配する愛香とは裏腹に、隣で書類を確認している同僚は、あま

りにもそつけない態度であった。

「……」

（でも、途中で気分が悪くなって、倒れてるかもしれない）

いくら酒癖が悪くてもお客様は、お客様だ。何か問題が起きてからでは意味がない――

「や、やっぱり私、様子見てきます！」

「あ、ちよつと！……心配性だなあ、愛香ちゃんは」

制止の声を聞かずカウンターを飛び出し、あつという間に見えなくなった新人りに、田村はやれやれと肩を竦めた。

案の定、長い廊下の片隅で壁に凭れかかり頂垂れている藤田が居た。

（ほら、見なさいよ！ 誰が、大丈夫なものですか！）

心の中で軽く田村を罵りながら、急いで彼に駆け寄り声を掛ける。
「お客様！ 大丈夫ですか？」

うつと、低い呻き声を上げながらも、ゆるゆると瞼を持ち上げた藤田に、愛香はほつと息を吐いた。

「ラウンジまで、歩けますか？」

「……ああ、すまない」

ふらついている大の男を、懸命に支えながら愛香は歩いた。なんとか、ラウンジまで辿り着く。取りあえず、ふかふかの長椅子へと彼を座らせた。

備え付けの冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、半分ほどコップへと移し替えた。程良く冷えているから、飲めば少しは酔いも覚めるだろう。

「どうぞ」

差し出されたコップを受け取った藤田は、一気に中身を飲み干した。些か気分も落ち着いたようで、苦しげに乱れていた呼吸も、今

はしっかりしている。ふと、顔を上げたと思えば。自分の目の前で胸を撫で下ろし、ほうつと安堵の溜め息を漏らす少女を、しげしげと見つめ始めた。

「君、見たことないけど、新入りの子？」

「あつ、はい。受付の仕事をさせて頂いてます」

空になったコップを受け取り、使用済みのプレートが貼られた棚へと戻そうとしている彼女へと、男は呟く。

「確かに、ちょっと地味、かな。ホステスは無理そうだね」

藤田から発せられた容赦ない言葉に、愛香は眉を顰めた。手から離れたコップが少々乱暴な音を立てて棚へと戻る。

（なつ、余計なお世話よ！）

「ご気分が優れないようなので、少しお休みになられた方が宜しいかと」

口に出そうになった暴言をぐっと飲み込み、営業スマイルを浮かべ、「それでは、失礼します」と部屋を出て行こうとした愛香は、突然、強い力で腕を掴まれバランスを崩した。踏ん張り切れず、柔らかな椅子へと倒れ込む。

「わっ！」

「ごめん、ごめん。怒らないでよ」

謝るからさ、と全く悪びれた様子を見せない藤田が、するりとその身体を寄せて来た。

「ちよつ、お客様！ は、離して下さい」

腕は未だに掴まれたままで、どんなに愛香が力を込めても、びくともしない。

——「酒癖が悪くて、すぐに手を出すらしい」

つい先ほど、同じ受付係である先輩の口に使っていた言葉が、パニック手前である愛香の頭を過ぎった。肌は栗立ち、顔がみるみる青ざめていく。

「あ、あの、仕事に戻らないと」

「客の傍にいるんだから、怒られないでしょ？」

「嫌、離し——」

力一杯の抵抗空しく押し倒されそうになった、まさにその時——
「そこまでにしていた方が、良いんじゃないですか？」

二人だけであると思っていた部屋に、突如響き渡った低く凜とした声。慌てたように愛香から手を離し、素早く藤田は振り返った。

彼の視線の先には、ドアに背を預けて腕組みをした黒髪の男が一人。無感動な瞳で二人を面倒くさそうに見つめている。

「だ、誰だ！」

「誰でも良いでしょ。それよりあんたのこと、今晚のお相手が探し回ってたぜ」

「なっ」

「待たされ過ぎて、かなり怒ってたな……あんたが別な女と居るって知ったら、ヤバいんじゃないの」

「き、貴様に、関係無いだろう！」

「いいのか、そんなこと言って。なんなら連絡してもいいんだぞ？」
くつりと歪んだ笑みを浮かべ、わざとらしく携帯をチラつかせる男に、藤田の赤ら顔が急速に色を失っていく。

「も、もしかして」

「ああ、アドレス聞いたんだ。簡単に教えてく——」

最後まで聞かず、慌ただしく部屋を飛び出して行った藤田を目で追い男はふんつと鼻で笑う。その切れ長の瞳が、状況を上手く理解できず呆けていた愛香へと向けられた。

「あ、ありがとうございます」

「あの男……本当に、見境なく手を出すんだな」

「えっ……」

「ここは、ガキが来るような場所じゃないんだよ」

男の冷ややかで鋭い視線に、突き刺された身体が震える。

「それとも、あんたから、金欲しさに誘ったとか？」

人は見かけによらないかと、くすくすと冷たい笑みを浮かべる唇が紡いだ言葉に、一瞬にして頭に血が昇って行くのを愛香は制御す

ることができなかつた。

「ふざけないで！ こっちには、遊んでる暇なんてこれっぽっちもないんだから！！」

勢い良く立ち上がり、体中に渦巻く怒りに任せて、キッと男を睨みつけてやる。

「失礼します！ 仕事なので」

荒々しく、ドアを開けて、部屋から立ち去った愛香は知らなかつた――

「くくつ、本当、ガキみたいだな」

走り去る彼女を、その男が、面白いものを見つけた子供のような表情で見つめていたことに。

最悪な出会い（後書き）

途中で切った方が、良いかなと思ったのですが、中途半端になるので止めました。

読みにくいよ！って方は、お気軽に教えてくださいね。

（そのほうがツダヨシも嬉しいです。）

藤田さんは、これから出てくる予定は一切ありません。ご安心ください。

思いついたままに書き進めてしまったので、続きに時間が掛かるかもしれません。

お待ち頂けると、ありがたいです。 > (_ _) <

ご意見、ご感想もお待ちしております。お気軽にどうぞ (^ ^)

そして、乙女は悪魔に捕まった？（前書き）

お待たせしました。

楽しんで頂けたら、光栄です（^^^♪

そして、乙女は悪魔に捕まった？

今日も、『花桜』は多くの客で賑わっている。

「何か、あつたんですかね？ あんなに怖い顔して」

「本当……どうしちゃったのかしら？」

ひそひそと囁き合う鈴恵たちの視線の先には、おおそ乙女らしからぬ、般若のごとき顔で虚空を睨みつけている愛香がいた。

（あ——もう、イライラする！）

昨夜、己の身に降りかかった忌々しい出来事が、頭から離れない。

——「ここは、ガキが来るような場所じゃないんだよ」

——「それとも、あんたから金欲しさに誘ったとか？」

酒に飲まれ手を出してきた藤田のことよりも、思い出してしまうのは黒髪に冷淡な瞳の最低な男が放った言葉。考えれば考えるほど、ふつつつとどうしようもなく怒りが込み上がってくる。

（どうせ……私は、子供っぽいわよ）

猫っ毛で絡まりやすい髪に、幼い顔立ちをより引き立ててしまう垂れた両目。そんな外見からか、周りに年を下に見られてしまうことが愛香の抱える密かな悩みだった。

（人のコンプレックスに触れるだけじゃ飽き足らず、あんな酷いことまで、言ってくるなんて……誰が、誰を誘ったって言うのよ！）

きつと自分は、あの男からお金に困っている惨めな女だと思われるていたに違いない。

（うう、信じられない！）

頭の中を駆け巡る妄想に、愛香の冷静な思考を司る回路は一つ残らず焼き切られてしまったようだ。

「なっ、ちよつと何してんの、愛香ちゃん！」

「あっ……」

突如響き渡った悲痛な田村の叫び声。黒くどろどろとした行き場のない腹立たしさに囚われていた愛香は、はっとして手元を見た。

書き上げたばかりの書類が、両の手によって思いっきり握り潰されている。慌てて、しわくちゃになってしまった、それを伸ばしてみたら元に戻るわけなどない。

「これ、もう駄目ですか？」

——真顔で一応確認してみる。

「当たり前だろう！ 書き直して」

「……、はい」

（あ——あ、やつちゃった）

田村の正しい反論に愛香はしょんぼりと肩を落しながらも、新しい用紙を取り出しペンを走らせようとした。

「……」

「……」

無言で田村が、ちらちらとこちらの様子を覗き見ていることに気付いた、受付嬢の口元がひくりと引き攣った。彼の中にばれないようにという配慮は存在しないのか、何度もお互いに視線がぶつかる。「どうされたんですか？」

いい加減にうんざりしてきた彼女が、問い掛けると待つてましたとばかりに田村の唇が動く。

「いや、その、今日の愛香ちゃん、いつもと全然違うからさ。何かあった——」

「いえ、そんなことはありません。いつもと同じです」

「そ、そっか……」

嗜好きな先輩の言葉をばつさりと遮って、愛香は抑揚のない声で口早に答えを述べてみせた。

『聞いて欲しくありませんオーラ』が上手く伝わったのか、田村はそれ以上何も聞いてこない。

気を取り直して書類の書き直しを始めようとした、その矢先——

自分の名を呼ぶ声に、愛香は再び動きを止められた。

「水谷君、ちよつと来てくれ」

呼んでいるのは、フロアの責任者——大森チーフ。

突然の呼出しに彼女は不安げに隣へと視線を向ける。しかし、「俺には分らない」と田村は頼りなく首を振るだけ。

「水谷君、急いでくれ！」

「すみません、今行きます」

急かすように強まった大森の口調に、愛香は全てを投げ出して彼の下へと駆け出した。

ぽつんと、一人取り残された田村は放り出された真っ白な用紙を見つめる。

「これ、俺がやり直さないといけない感じ？」

そして、乙女は悪魔に捕まった？

「君、神崎音弥さんかんざきおとやと知り合いなのか？」

「へっ？ …… えつと、あの、どちら様ですか？」

大森の口から零れ出た、聞き覚えのないその名に、愛香はきょとんとし、首を傾げた。

「いや、彼は鈴恵さんおーなの、ご友人である神崎氏の息子さんでね。たまに、ここへ顔を出すんだが。そうか、お客様としては、ご登録されてないから、君が知るはずもないな」

「その方が、どうかされたんですか？」

「うーん、可笑しな話だが、彼に『水谷愛香』を呼んで来てくれと頼まれてね」

お待ちになっているんだ、とまで言われ、ますます愛香は困惑する。

（明らかに関係も立場も違う人なのに、何故私を呼ぶの？）

「もしかしたら、君のことについて鈴恵さんが、話したのかもしれないな」

一人で勝手に納得してしまった大森と違い、愛香は胸の内に膨れ上がる不安を拭い去れずにいた。

楽しそうちに、会話を弾ませながら、お酒を味わっている小父様たちの間を足早に通り過ぎ、連れて来られたのは一番奥のボックス席。
「お待たせしました」

「やっと来たな」

ゆつたりと、琥珀色の液体の入ったグラスを傾けている、客の顔を確認した愛香は、これ以上ないほどに両目を見開き、絶句した。
ついつと、切れ長の黒き瞳をこちらに向け、にやりと薄い唇を歪ませたのは。

——間違はなく、昨日出会ってしまった最低、最悪な男、そ

の人だった。

「昨日は、どうも有難うございました」

非常に不愉快ではあるが、助けてもらったことは、紛れもない事実なので、一応礼を述べる。

「別に、女に頼まれてアイツを探していただけだ。にしても、今夜は静かなんだな。怒鳴らないのか？」

意地の悪い笑みを浮かべている男を、愛香は無言で睨みつけ、つんと顔を背けた。どうして、この男と向かい合って、話などしなければならぬのか。状況が全く理解できない。

自分への拒絶の色を、全く隠そうとしない受付嬢に、音弥は呆れたようにグラスを揺らす。カラカラと、涼やかな氷の音が響いた。

「おいおい、客に対して、そんな態度とって良いのか？」

「……正規のお客様には、きちんと対応させて頂きますけど」

「まあ、確かに客じゃないな。今日も表から入ってないし」

「では、どのようなご用件ですか？」

愛香の投げやりな質問に、音弥の双眸がずっと細く鋭利な光を宿す。彼から漂い始めた、得体の知れない威圧感に、思わず身体に緊張が走ってしまい、愛香は悔しげに眉を顰めた。

「そうだな、時間の無駄だし本題に入ろう」

「本題？」

「ああ。未成年者がこの店で働いているのは、何故だ？」

「！」

さああと、瞬く間に音も無く青ざめてしまった愛香に、音弥はつまらなそうに、ふんつと鼻を鳴らした。

「鎌を掛けたつもりだったが、その顔色じゃ凶星だな」

「……」

「つたく、募集要項には二十歳以上って書いてあっただろう。ここ

は、自分じゃ責任を取れない、まだ親に庇護されてるような年の、あんたが来ても良い場所じゃあない」

「そ、それは……」

どうしても雇って貰いたくて、履歴書には、偽りの情報を書いた。夜のバイトをしていることを家族には一言も告げていない。

——必死になって、隠し通してきたはずの虚偽の数々を、この人には見透かされてしまっている！

反論のための言葉を紡ぐことが出来ず、愛香は力無く、項垂れた。見れば、弱々しくその身は震えている。そんな彼女の様子に、音弥の顔色は変わることなく、ただ、ぴくりと片眉をほんの少しだけ動かしたのみ。

「どんな理由があるにせよ、ここにはもう居られんな。おい、君。済まないが、オーナーを呼んでくれ」

「ちよつと、待って」

慌てて愛香は顔を上げ、彼の指示を受けた従業員を止めようとしたが、音弥の鋭すぎる眼光に、身が竦み声を失った。ゆるゆると俯き、唇を噛み締める。情けなくて、涙が零れそうになった。

「どうされたの？ 音弥さん」

ぱたぱたと小走りで、二人の下へとやって来た鈴恵は、愛香の隣へと優雅な動作で腰掛けた。

いつもならば、憧れに満ちた瞳で彼女を見つめる愛香であったが、今は、それどころではない。

（もう、お終いだ……信用してくれてた鈴恵さんを騙していたんだもの。自分から話そう）

覚悟を決めた愛香が、口を開くよりも一歩先に、音弥の唇が動いた。

「鈴恵さん、こいつを、俺に譲ってくれ」

（はっ？）

耳に届いた、理解し難いフレーズに、愛香は頭が真っ白になった。

そして、乙女は悪魔に捕まった？（後書き）

読んで下さっている、皆さま!!

本当に、有難うございます>（――）<

ツダヨシは、感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも、精進していきますね！

そして乙女は悪魔に捕まった？

「あらっ、音弥さん。昨夜言っていたことは、本気だったのね」
「そうですよ」

嬉しそうに顔を綻ばした鈴恵に、音弥は軽く頷き、グラスの中で揺れていた琥珀色の酒を、くいつと一気に煽った。

受けた衝撃が脳の許容範囲を超えてしまったのか、目を見開いたまま、微動だにしない愛香を放置して、二人は話を続ける。

「鈴恵さんに誓って、俺が必ずコイツに、似合いの仕事を紹介しますよ」

「まあ、頼もしいわ」

オナー
彼女に向けて清々しい笑顔を浮かべている男の瞳が、ちらりと自分を捕らえたとき、一変して毒々しい色を湛えたことに気付いた愛香は、ぎよっと顔を引き攣らせた。

（この人、何考えてるの？）

鈴恵に対して、明らかに猫を被っている彼の目的が分からず、愛香は小さな苛立ちから、ぐっと奥歯を噛み締めた。

「私は、愛香ちゃんの助けになりたいと心から思っていたのだけど、そうね、やっぱり、うちじゃ親御さんが心配なさるものね」

ぼつりと呟かれた、鈴恵の言葉に、愛香はハッとして彼女を見上げる。何も言わず、ただ寂しげに微笑んでみせる鈴恵の真っ直ぐな瞳に晒され、罪悪感の渦巻く胸の苦しさ、愛香は堪え切れず項垂れた。

——自分が、未成年であることも、家族に連絡さえしていないことも、当に鈴恵は気付いていたのだ。

「……ごめんなさい」

「謝らないで頂戴。愛香ちゃんは、とってもよく頑張ってくれたわ。私も助かっていたのよ」

か細く震えを帯びた声で、謝罪の言葉を口にした愛香に、鈴恵はふるりと首を横に振ってみせた。

「音弥さんは、一度交わした約束を決して違えたりしないわ。きつと愛香ちゃんにとって、良いお仕事を紹介してくれる。私が保証するから大丈夫よ。安心して頂戴」

（いや、無理だと思います……鈴恵さん）

包み込むように愛香の手を握りながら、にっこりと笑い掛けてくれている鈴恵とは、裏腹に、彼女から絶対的信頼を寄せられているはずの、目の前の男は、「もう用は済んだ、関係ない」とばかりにこちらへは目も呉れず、冷めた眼差しで辺りを見渡し酒を飲んでいった。

ははっと、愛香は力なく乾いた声で、笑う。

（そうか。彼は、私の仕事を辞めさせたかっただけ）

彼女は、悟った——至急、新しいバイト先を自分の力で探さなくてはならないと。

そして乙女は悪魔に捕まった？（後書き）

かなり短いですが（――；）

切りが良いと感じたので、ここまでにしました。
楽しんで頂けていたならば、嬉しいです。

本試験があと一週間ちよいでやって来てしまうため、更新が滞ります。

こんな話の途中で止めるなんて、酷い話ですが……本当にすみません（――；）

気長にお待ちくださいね。

鳴り響くは、絶対命令？（前書き）

お待たせしました。

鳴り響くは、絶対命令？

「本当に、大丈夫？」

「何かあったら、ちゃんと連絡よこしなさいよ」

「うん、ありがとう。……また、明日ね」

昼過ぎに講義が終了する木曜日。

ただならぬほど沈んだ空気を纏った自分を、心配してくれる友人たちへ、曖昧な微笑みを浮かべつつ愛香は別れを告げた。

からりとした清々しい青空が広がる帰り道。一人寂しげに歩く彼女の唇からは、本日何度目になるか分からない溜め息が、また一つ零れ落ちて行く。

（これから、どうすれば良いの？）

そんなことは、考えなくても分かり切ったことではないか。頭に浮かんだ問いに、少々苛立ちながら自答する。

——早速に新しいバイト先を探して、元の生活に戻ることに。そこそが、今の自分に求められている最重要事項だ。

今まで通りの生活を送っていたならば、夕方には『花桜』での仕事が続いていた。しかし、昨日付けで職を解かれてしまった愛香にとって、もうその場所に踏み入ることは叶わない。やっと夜の店を彩る独特な雰囲気にも、受付という仕事の内容にも慣れてきた時期であった。そのため、有無を言わず居場所を奪われたことに、初めは憤りを覚えたが、嘘をついていた自分にも非があると、少なからず愛香はその胸に感じていた。

きつと鈴恵の体面を考え、あの男も行動したのだろうと、頭では理解できた。では心は？　なかなかついてこないのが現実である。

（まあ、大方私に対する嫌がらせなんだろうけど）

チリツと燦ぶるような仄暗い感情に、愛香は眉を顰める。本人に聞いたわけではない。ただ、話が終わった後の態度を見る限り、口が裂けても彼が友好的であるとは言えなかった。バイト先の紹介も

期待すること自体、無駄なことに違いない。唯一の救いは『神崎音弥』、その人に、二度と会わなくて済むこと、だ。

はたり、と愛香の歩みが止まった。言葉なくアスファルトの上に棒立ちになったまま、口元を押さえ、今しがた浮かんだ思いを反芻する。

——そうだ。もう、あの男に会うことはないのだ。秘密を握った彼に、店に来るたび嫌味を言われ続けるよりも、すっぱりと関係を絶てたことに意義があるのではないか！

マイナスからプラスへと大きく舵を切った思考は、ますますスピードを上げ易々と愛香の心を支配して行く。何故、後悔ばかり感じて重く塞ぎ込んでしまっていたのか、むしろ喜ぶべきだ、と。

ここ数時間、伏せがちだった鳶色の瞳は、瞬く間に輝きを取り戻す。この幸せに満ちた考え方こそ、知り合いから「良く言えばポジティブ、悪く言えば楽観的ね」と言われる由縁なのだが、当の本人に、その自覚はないに等しかった。

掛け持ち中である、もう一つのバイトは明日なので、今日は予定がない。時間が許すまで新たな勤め先を探し回ってみよう。晴れやかな表情で意気揚々と一步を踏み出そうとした彼女を、肩にぶら下がる鞆の中から聞こえてきた、飾り気のない機械音が引き留めた。ごそごそと鞆の中身を引っかき回して、一心に鳴り続けている携帯電話を引っ張り出す。

「誰だろう？」

画面に映し出されている電話番号は見知らぬもので、愛香は一瞬戸惑う。待たせては悪いと、慌てて通話ボタンへと指を滑らす、が、間に合わずふつりと着信音は途切れてしまった。

用事があるならば、またかかってくるだろう。待ち受け画面へと変わってしまった携帯電話を、ぱたりと折り畳む。ピースで作られた黒猫のストラップが、ゆらゆらと揺れた。愛らしい丸顔の猫に向かって、くすつと笑いかけ、さあ仕舞おうと鞆を開いた、その時。

彼女の手の中で、またも飾り気のない機械音が鳴り響き始めた。驚いて確認すれば、先程取り損ねた番号である。

「はい、みず」

「電話にも、気付かないほど忙しいのか？」

名乗ろうとした愛香を、綺麗に無視して問いかけてきたのは低く落ち着いた男の声。尊大な物言いに声の主が誰であるかを理解してしまった愛香は、一瞬にして我を忘れた。

「な、なん、な！」

「日本語になってないぞ。それより、声のボリューム下げろ」

「耳が痛てえよ」と文句を言われ、はっと息を飲む。恐る恐る周りを見渡した愛香は口元を引き攣らせた。かなり大声を上げてしまっていたらしい。道行く人々の視線が明らかに冷たい。羞恥心から顔だけでなく耳までもが赤く染まっていることを感じながら、愛香は声を潜めた。

「……なんで、私の番号知っているんですか？」

「鈴恵さんに、教えてもらったんだよ。それぐらい考えれば分かるだろう」

呆れたような音弥の声音。御親切に、わざとらしい溜め息付き、だ。ざわりと神経を逆撫でされ、愛香は思いつくままの悪態を叫びそうになる。ここは外だ、往来だと必死に耐えてどうにか平静を装った。

「何の用ですか？ 仕事も辞めたんだから、私、貴方と連絡取り合う意味ないですよね？」

縁が切れたと、喜んでいたのだ。浮足立っていた、あの気持ちを返して欲しい。

「俺が、仕事先を紹介してやるって言っただろう。たった一日前のことを忘れてるようじゃ、お先真っ暗だぞ」

「そ、そこまで、記憶力は低下してません！……と言うか、本気だったんですか？」

「約束だからな。当り前だろう」

思わぬ方向へと進み始めた会話に、愛香は戸惑った。本当に紹介してくれるなど夢にも思わなかったのだ。鈴恵に対して、調子良くつかれた彼の嘘だと決め込んでいたのだから当り前である。押し黙ってしまつた彼女のことなど気にした様子もなく、淡々と音弥は話を続ける。

「週二日。水、土は空けておけよ、仕事だからな」

「えっ、水、土ですか？」

「そう。来週の水曜日からだ、忘れるなよ」

こちらのスケジュールなどを一切考慮するつもりはないらしい。

「ちよつと待つて下さい」と慌てた様子の滲む愛香の声に、音弥は不機嫌そうに声のトーンを落とした。

「なんだよ？　どっか御不満か？」

「あの、まず、どんな仕事なんでしょうか？」

不満も何も、些か強引すぎるのである。一つの情報も与えられていないのに、「はい、そうですか」と頷けるはずがない。彼との間に大きな考え方のズレを感じて、痛む頭を抱えながら愛香は尋ねた。
「ああ、心配しなくても大丈夫だ。おチビちゃんにもできる簡単な仕事だからな」

悪意のたつぷりと籠った言葉。電話越しで底意地の悪い笑みを浮かべているであろう男を想像し、愛香の血相が変わった。彼女の本来ならば、垂れているはずの両の目が、吊り目に見えるほどである。

「お断りさせて頂けますか？」

「何言つてんだ、紹介してやつたんだから恩に報いろよ。俺が鈴恵さんに怒られるじゃないか」

——貴方が怒られたって、私は痛くも痒くもない。どちらかと言えば、彼女からの信頼が地に落ちれば良いのではないかと思う。と胸の内で黒い炎を盛大に燃やしながら、少女は静かに口を開いた。

「いえ、自分で探します。わざわざ、ありが——」

「とにかく、伝えたからな。詳しいことは、また連絡する」

「ちよつと——」

一方的に切られた携帯電話からは、ツーツーと物悲しい無機質な音だけが聞こえてくる。相手の余りの横暴さに、愛香は携帯を握り締める手が、震えてしまうことを止めることができなかった。約束を守ろうとする彼を少しでも良い人なのだと認識してしまった自分が、憎い。

（絶対、断つてやる）

どんなに時間がかかっても、新たな職場は自分の力で探そう。『神崎音弥』の力なんぞに頼りはしない。ぐっと拳を握って決意を固めていた、愛香の耳にメールの受信を知らせる短いメロディーが届いた。メールの内容を確認した彼女の顔色が、青を通り越して、血の気の失せた白へと変わっていく。

書かれていたのは、たった一文。

『断るなんて選択肢はない、覚悟しろ』

されど、その下に貼り付けられた数字の列が問題であった。どんなに読み返しても、それは実家の電話番号で。

「そんな、嘘でしょう」

このメールは断れば家に電話、つまり隠していた夜のバイトについてばらすぞと伝えてきているのだ。家族を盾にするなんて卑怯だと、泣き喚いてもあの悪魔には無駄だ。従うしか残された道はない。いつの間にか決められてしまった自分の行く末に、愛香はただ果然と立ち尽くした。

「先輩、ここに居たんですか。早くしないと、プレゼン始まりますよ」

用の済んだ携帯電話を折り畳む男の背に、焦りを含んだ声が投げ掛けられた。口元にうつすらと浮かんでいた笑みを、完全に消して男は声のした方へと振り向く。

「探させたいだな。悪かった」

「俺は良いんですけど、早川さんがピリピリしてます」

気の強い上司のことを思い出し、音弥は苦笑した。これ以上機嫌を損ねない方が良いだろうと、足早に歩き出す。

「何してたんスか？」

「うん？ ああ、頼まれていた連絡を済ましてた」

さらりと答える先輩はいつもと変わらぬ無表情である。しかし、何故か上機嫌に見えてしまい後輩は小さく首を傾げた。

「先輩、何か良いことありました？」

「何だよ、急に」

気持ち悪いなど、顔を顰めた音弥の態度に隣を歩く若者は眉尻を下げ頭を掻いた。無意識なのか、唇からは「すみません」と弱々しい謝罪の言葉が漏れ出てしまっている。

「その、機嫌良さそうに見えたんで」

「何だそれ？ 俺が、いつも不機嫌みたいじゃないか」

「……ははっ」

訳分からんと肩を竦めてみせた先輩に、乾いた笑いで後輩は応えた。

（見えちゃうんですもん、不機嫌に）

会話、そのものに興味を失くしたようで、さつさと部屋の中へと消えて行く先輩に向かって、こっそりと溜め息を漏らしながら、彼もドアの向こうへと姿を消した。

新しい仕事？（前書き）

大変、長くお待たせしてしまいました。
楽しんで頂けると、嬉しいです。

新しい仕事？

——どうして、こんなことになったのだろうか。

考えたところで、明確な答えなど分からない。ただ、近頃、あり得ないほどに運が悪いだけ。

世にも恐ろしい電話を受けてしまったのは、先週の木曜日。その後、諸悪の根源である男——音弥からの連絡は、「仕事場だ」との一文に、住所が記された、酷く簡素なメール一通のみであった。

（住所だけじゃなくて、名前とか地図も添付してよ！）

余りにも情報量の少なすぎる、不親切極まりない文面を、愛香は不満げに唇を尖らせ、睨みつけた。

しかし、どんなに強がったとしても、実家の電話番号、すなわち家族を盾にされている彼女に、逆らう術など最早ない。

厄介な相手に弱みを握られてしまったものである。

——もう、止めよう。この場に居ない人間に向って、胸の内から溢れ出る文句の数々を思い浮かべても、気分が落ち込む一方だ。

もやもやとした歯がゆい思いに、無理やり蓋をして、愛香は目的の場所を探すことにした。

これほど携帯電話の便利さに、感謝したことはないかもしれない。地図の検索欄に、メール中に綴られた、長つたらしい住所を、ポチポチと一語一句確認しながら入力する。

幸運と言って良いのか、悪いのか。音弥が指示してきた新しい職場は、愛香の住むアパートから、一駅しか離れていなかった。

（まあ、無駄な交通費が、かからないことは嬉しいけどね）

余計な出費があるよりは、ないほうが良いに決まっている。些かケチ臭い考え方かもしれない。が、お金のありがたさを、日々ひしひしと、その身に感じている愛香にとっては当り前の考えであった。

そして、今日は約束の水曜日。

講義終了後、大学からの帰り道。愛香は家には寄らずに、そのまま、音弥から強引というよりも、半ば脅迫に近い形で紹介された、その場所へと向かっていた。

携帯電話を見つめながら、閑静な住宅街を歩く彼女の足取りは、傍目から見ても「軽やかだ」とは言い難い。

（大丈夫だよ……）

拭い去ることのできない不安や疑念。困ったことに愛香は、バイト先の名前はもちろん、仕事内容さえも知らないまま、ここまで来てしまっていた。

実は彼女自身、もっと詳しく聞いた方が絶対良いだろうと思い、何度も音弥に連絡を取ろうとしたのだ。それなのに――

（何で、私が聞かなくちゃいけないの？）

最後の最後で、何故か妙な意地を張ってしまう、変なところで頑固なもう一人の自分がいた。そのため、一度も発信ボタンを押すことはできず……気が付いたら、当日で。

慌てて、馬鹿にされることを覚悟しながら、音弥へと電話を掛けたのだ、が。焦っている人間には、優しくないことが世の常なのか――全くつながらなかったのである。情けないと後悔してみても、時すでに遅し。

素直になれなかった自分に対する微かな苛立ちと、少しずつだが確実に膨らんで行く不安な気持ちを、懸命に堪えつつ、愛香は黙々と歩き続けた。

次の角を左に曲がるようにと、画面上に映し出された小さな地図が示している。案内に従って歩みを進めれば、数十メートル行かぬ内にお目当ての場所へと辿り着いた。

用の済んだ画面から、諦めたように愛香は視線を逸らし、どこと

なく浮かない顔を上げ、前を向く。

「あ、あれ？」

瞳に映り込んできた映像に、愛香の唇から、気の抜けた声が零れ落ちた。

彼女が立っているのは、緩い坂の上——中々見晴らしの良いその土地には、店などではなく、立派な高層マンションがそびえ立っていたのである。

目を大きく見開いてみても、変わることはないその景色を、愛香はただ、ただ凝視する。バイト先と指示されて、勝手に飲食店や販売店だと思っていた。

——なのに、目の前に見えるのは、どう表現しても『マンション』だ。

現状を上手く飲み込めず、愛香は無意識の内に、ぽかんと呆けた表情で、無駄に背の高い建物を上から下まで眺めていた。

広めのバルコニーが見えた。エントランスは自動ドア。自分の借りている、ボロボロで古めかしいアパートとは大違いだと、眩しすぎるものを見たときのように、愛香の垂れた双眸が細くなる。

（家賃、高そうだなあ……って、ち、違う！）

全く関係のないことに、考えを巡らし始めていたことに気付いた愛香は、ふるりと左右に頭を振った。

今、自分が居る場所が本当に正しいのか、調べなくては話が進まない。慌てて、背負っていたネイビー色のリュックサックの外ポケットから、仕舞い込んだ携帯電話を引っ張り出した。先ほどまで開いていた地図の情報を呼び起こす。手帳へと書き写した例の住所と何度見返しても、登録した住所に間違った箇所などは一つもなかった。

要するに、与えられたバイト先は、この場所で合っているということである。

——ますます、訳が分からない。

このまま自力で、仕事の内容について考えたとしても、真っ暗闇

の中、這い蹲りながら手探りで失くし物を探しているようなものはつきり言って時間の無駄だと、自分に言い聞かせ、愛香は迷うことなく発信履歴へと画面を切り替えた。

（頼むから……今度こそは繋がってよね）

祈るような気持ちで、一番上に表示された『神崎音弥』の文字を選択する。ふうつと一度大きく息を吐き出し、通話ボタンを押そうと指を動かした。

「ちよつと、お嬢ちゃん！」

突然、声を掛けられたことに対する驚きのあまり、愛香の身体はビクツと大袈裟なほどに震えた。危うく手にしていた携帯電話が、掌の上から滑り落ちそうになる。

そろりと、不安げに声のした方へと振り返ってみる。視線の先には、見知らぬ中年の男性が一人。マンションの入り口にある、数段しかない階段の一番上でまるで「こっちへ来い」というように、しきりに手招きをしていた。

（私のこと？）

首を捻りつつ、愛香が自分を指差すと男性は大きく首を縦に動かした。

「もしかして、君、みずたに……えーっと、なんだったけな。最後は、確か『か』だったんだけど」

呼び声に応え、駆け寄って来た愛香の顔を一目見るなり、男性は「あすか、いや、れいかだったかな？」と中途半端に惜しい名前を、ぶつぶつと唱え始めた。

「あの、私——」

「ああ、そうだ！『みずたにあいか』さんでしょう？」

時間は掛かったが、見事に名前を言い当てられた。自信満々な表情で見つめてくる男性に、愛香は素直に頷いて見せる。彼の首からぶら下がっている、長い紐の先に取り付けられたネームプレートに『管理者』の文字を見つけ、愛香はその身を固くした。

「そうです。でも、どうして私の名前を？」

「神崎さんから、君宛ての荷物を預かっていてね」

管理人によると「今日、必ずこのマンションを年若い女性が訪れるので、代わりに渡しておいて欲しい」と音弥本人から頼まれたのだと言う。

「背は低めで、垂れ目に明るめの髪の子だと、聞いていたから、君じゃないかなと思ったんだ」

——よくも、まあ、そんなアバウトな説明だけで、頼み事を引き受けたものである。彼には、間違えて恥を掻いてしまう可能性だつてあつたのだ。

にこにこと朗らかな笑みを浮かべている、人の良すぎる管理人に、愛香は顔を引き攣らせながらも尋ねた。

「その、荷物つて何ですか？」

「これだよ」

手渡されたのは、大きめの茶封筒。意外と中身が詰まっているようで、ずっしりと重い。

表紙には、太い、しかし読みやすい字体で『追加分』と記されていた。

（追加？）

何についての追加だというのか。全く意味が理解できず、眉を顰めた愛香に管理人がもう一つ手渡してきた物——。

「と、これが鍵。失くさないように注意してよ。部屋は705号室だよ」

音弥からの伝言を、全て伝え終わってしまったようだ。「良く解らないけど、頑張つてね」と微妙な励ましの言葉を置き土産に、管理人は箒を持って外へ出て行ってしまった。

ぽつんと、静かすぎるフロアに取り残された、哀れな一人の短大生。

「……」

ほんの僅かな間、掌に乗つけられた小さな金属物を言葉なく見つ

めた後、愛香は唇を固く引き締めた。

重みのある茶封筒を、胸の前でぎゅっと握りしめ歩き出す。
預けられた荷物は、受け取ってしまった。今更、戻ることはできない。

（行くしかない……）

緊張のためか、小刻みに震えてしまう指先で、愛香はゆっくりとエレベーターのボタンを押した。

新しい仕事？（後書き）

新しい仕事？（前書き）

なかなか更新できずに、すみません！
楽しんで頂けると、嬉しいです。

新しい仕事？

「誰だ？」

電源を入れた途端、テーブルの上で振動し始めた携帯電話。

一通の書類を気難しい顔で見つめていた音弥は、やや苛立った様子で『それ』を手繰り寄せた。開いた画面上に表示された名を見て、自分が頼んでいた用事のことを思い出す。

（ああ、そう言えば今日だったな）

作業に夢中になっていたため、すっかり忘れていたのだ。現に昨日は家にさえ帰っていない。音弥は今、徹夜に近い状態であった。

鳴り止まぬ呼び出し音に、苦笑しながら通話ボタンを押す。

「ああ、神崎さん！ 良かった、つながって」

つながらなかったことに、余程焦っていたのだろう。電話越しの

男は、大きく安堵の溜め息を漏らした。

「すみません、電源を落としていたもので」

研究室に閉じ籠っていたのだと、音弥が説明した途端、男の声が翳った。

「お邪魔でしたかね？」

「いいえ、大丈夫です。一区切りつきましたから。それより、彼女に渡して頂けたんですね？」

元々、連絡が来ることさえも記憶の彼方へ追いやっていた、こちらの方が悪いのだ。相手に気を使わせないよう音弥は口調を和らげ問い掛けた。

「ええ、頼まれた物はすべて渡しましたよ」

「そうですか、ありがとうございました」

嬉々として報告する男へ丁寧な礼を述べ、通話は終了。

用は済んだとばかりに、机の隅の方へと携帯電話を放り投げようとした音弥の手が止まる。

『不在着信 五件』——待ち受け画面に記されたメッセージを見て、

音弥は片眉を微かに持ち上げた。上から二件は今しがた話をしていた管理人からである。問題は残りの三件だ。連なっているのは、すべて同じ名前。思案するように音弥の切れ長の双眸がずっと細くなつた。

——余程、連絡せねばならぬことがあつたのだろう。でなければ、彼女からの着信などあるはずがない。

じつと無言で画面を見つめて数秒。

電話をかけるのかと思いきや、ふんつと小さく鼻を鳴らしただけで、携帯を折り畳んでしまった。パチつと乾いた音が人気のない休憩用のロビーに響く。

（聞いて欲しいことがあるんなら、そっちからかけてこい）

くつと薄い唇の端を歪めながら、コーヒーの入った紙コップへと音弥は手を伸ばした。

一番奥の角部屋。ダークブラウン色の扉に打ち付けられた、三桁の数字を確認する。

——705、ここで間違いない。

瞳を閉じて、数回。深呼吸を繰り返した後、愛香はゆっくりとインターホンを押した。傍目から見たら不審な行動なのかもしれない。ただ、ありがたいことに、周りを幾ら見渡しても人影は見られなかった。

くぐもつた呼び鈴の音が、部屋の中で響いている。しかし、人の気配やドアの鍵が外される音は一向に聞こえてこない。

（まあ、当り前だよな）

鍵を受け取っているのだから、家主は不在なのだろう。

『念のため』の確認作業を終え、思ったよりも腕に負担を掛ける中身不明の茶封筒を抱え直しながら、愛香はドアノブの上にある小さな溝へと鍵を差し込んだ。そのまま、勢いに任せて、くいっ

と手首を右へ捻る。

かちりつと金属が重なり合って解ける音がした。荷物に注意しながらドアノブへと腕を伸ばす。

（良いのかな？ 勝手にお邪魔しても……）

今更考えても仕方のないことだとは分かっている、でも——。他人の家、しかも見知らぬ人の部屋に入るのは、さすがに不味いのではないか。頭の中を駆け巡る様々な思いに囚われて身体の動きが鈍る。その結果、ドアノブに少しも触れることなく愛香の腕は元場所へと戻ってしまった。

何かと幸が薄い女子大生は、大きく眉尻の下がった困り果てた表情で抱える荷物を交互に見つめる。

住人でないにもかかわらず、部屋の鍵を渡されたのだからここが仕事場に違いない。封筒に関しては、中身だけでなく記された文字の意味も謎のままであるが。

（もしかしたら、仕事^{バイト}についての書類が入っているのかも！）

ふと、脳裏に浮かんだ考えに愛香は素直に従った。問題となっていた一室の入り口に背を預けて座り込み、少々厳重に貼り付けられている封を剥がしにかかった、まさにその時。

——ポーン

「こつちだよ」

「へえ、広いなあ。良い場所じゃん」

微かに聞こえた、エレベータの到着を知らせる軽やかな音。その後、無人だったはずの通路に若い二人組の話し声が木霊した。下を向いていた愛香は、はじかれたように顔を上げ自分が通って来た道を凝視する。

間違はなく角を曲がって近付いてくる足跡を、確かに感じた愛香の動きには一切の無駄がなかった。

彼らを視界に捕らえることなく、目にも止まらぬ速さで立ち上がったかと思えば。

微塵の迷いも見せず、勢い良くドアを開き、部屋の中へとその身

体をねじ込んだのだ。どちらかと言えば、運動が苦手である普段の彼女からは想像できないほどの素早さであった。

（はっ。ああ、びっくりした）

——見つかってしまう前に、隠れてしまいたい。その一心で起こした行動。

もちろん、やましいことなどひとつもしていない。

部屋の前に座り込んで、書類を漁っている自分を見た他人から「あの子、何しているんだろう？」と、奇異の目で見られること自体に、十八歳のうら若き乙女の心は堪えられそうになかったのだ。何食わぬ顔で堂々としておけば問題はなかったのだろうが、焦りという感情には、人を大胆で荒つばい考えへと導く作用があるようである。

ボタンつと強めに閉まった扉に寄りかかり、俯き瞳を閉じた愛香は荒い息を繰り返していた。呼吸に合わせて、煩いほどに鼓動していた心臓が徐々に落ち着きを取り戻して行く。全身に満ち始めた安堵感からへたり込みそうになり、慌てて両足に力を入れた愛香が顔を上げる。緩やかに開いた垂れ目で、ぐるりと周りを見渡した。

冷たく滑らかな白い壁に囲まれたフロアリングの廊下。奥の方で左に向かって折れ曲がっているため先は見えない。

予想外の出来事に遭遇し、勢いで中へ入ってしまったが、それは、それで良かったのかもしれない。

（独りじゃ、なかなか踏ん切りがつきそうにもなかったし……）

彼女の持ち前である『切り替えの早さ』は、今日も健在のようである。

「お邪魔……します」

脱いだスニーカーを丁寧に揃え、誰もいない部屋に向かって律義に挨拶を述べてから、愛香は一步を踏み出した。

新しい仕事？（後書き）

続き、頑張っています。

もうしばらく、お待ちくださいませ。――

新しい仕事？

白い壁の所々に扉があり他の部屋の存在を示していたが、ここは見知らぬ他人の家だ。許可なく覗き込むなどの真似は避けるべきである。

どの扉の前であっても立ち止まることなく、目指すはこの一室の最果ての場。すなわち、行き止まりを求めて愛香は前へ前へと進んだ。

「う、わっ。すごい……」

終に廊下が途切れ、目の前に広がった『壁』以外の新たな光景。驚き目を見開いた彼女の唇からは、感嘆に満ちた声が零れ落ちた。

無駄に長かった廊下の果てに辿り着いたのは、自分の部屋とは比較にならないほどの広々としたリビング。しかも、お洒落なカウントーキッチン付きであった。

（こんなの私の部屋に置いたら、住むスペースがなくなっちゃうよ！）

部屋の中心に設置された、大人三人が余裕で寛げるであろう革張りのソファ―に目を奪われ、万年金欠の短大生は舌を巻いた。少なからず顔が青ざめて見えるのは、果たして気のせいなのだろうか？

「……」

ほんの少しの間。突如、襲いかかった『身の丈に合わぬ世界』を処理しきれずに呆然と立ち尽くしていた愛香であったが、本来の目的を思い出したようだ。

ふらりと力ない足取りながらも、リビングの中へと足を踏み入れた。落ち着かないのか、琥珀色の瞳が忙しく辺りを見渡している。部屋の広さに対して置いてある家具類が少ないため、余計に広く感じてしまうようだ。

映り込んでくるのは、背の高いスタンドにテレビ、テーブル、ソ

ファー、そしてマガジンラックと必要最低限の物ばかり。その全てがシックな黒色で統一されていた。

バルコニーへと続く大きめの窓に取り付けられたカーテンの淡い緑色や、テーブル周りに敷かれた肌触りのよいラグのワイン色が挿し色になっていて、とても見栄えが良い。

（……あれ？）

一通り、全体をぐるりと見渡して感じた『違和感』に愛香が首を傾げた。原因を突き止めるため、もう一度周りを注意深く観察する。

そして――

ソファアの目の前にある、低めのテーブルに彼女の瞳は釘づけになった。

テーブル自体は部屋の雰囲気にとってもよく調和している。問題はその上であった。

――不自然なほどに積まれた紙束。ざつと見ても百枚以上はありそうだ。隣にはノートパソコンが、圧倒的な存在に埋もれるように置かれていた。

リビングには、有り余るほどのスペースがあるのだから、置き場所困ったとは考えにくい。

（家主の仕事道具なのかもしれない）

胸の内で一人納得した愛香は、とある荷物を自分が抱えっぱなしであることに気付いた。何より初めに中身を確認するつもりであった、音弥からの正体不明の預かり物である。

思いがけないハプニングに遭遇したため、中途半端に外れかけていた封を丁寧に外す。訴えてきていた重みが示していた通り、その中身は蜜に詰まっていた。

一気に取り出してしまつては、戻す時に苦勞してしまいそうだ。別の用紙を傷つけないように注意しながら、愛香は一番上にあつた用紙のみを慎重に取り出した。

ゆつくりと姿を現したのはB5サイズのコピー用紙。予想通り仕事に関する説明書のようなものである。

ようやく知り得たかった情報と巡り合えた嬉しさからだろう。明らかに上機嫌になった短大生は、握った拳で控えめにガッツポーズをしつつ、意気揚々と書面に目を通し始めた——のだったが。

「なっ、なにこれ」

読み始めたばかりだというのに、彼女の顔がみるみる強張っている。つらつらと規則正しく並べられた文字の列を、鋭く険しい視線が往復すること計二回。

言葉の端々に潜み『己の存在』を絶妙にチラつかせてくる『雇い主』

その正体に気付いてしまった、哀れな乙女は声を失う。

（まさか……そんなはずないよ！）

自分の思い浮かべた信じがたい真実に、口元が変に引き攣ってゆくことを止められない。

——これは、一刻も早く確認しなくては。

邪魔になる荷物は、ソファアの上に放り投げられた。背負っていたリュックサックが些か乱暴に床へと転げ落ちてしまったが、気にしている暇などない。外ポケットから取り出したのは『唯一の連絡手段』

紹介者である彼の番号を呼び起こすと、愛香はすぐさま発信ボタンへと指を滑らせた。

動揺している自分を嘲笑うかのように鳴り続けるコール音。

——連絡を取りたいだけなのに、何故こんな目に会わねばならぬのだ。

焦る気持ちに、じわり、じわりと苛立ちが混ざり出す。

「もう！ 無神経男のくせに待たせないでよ。早く、出なさ——」

「……おい、随分な挨拶だな」

いつの間にかつながっていたようだ。耳に届いたどこか棘のある

低く凜とした声に、愛香は危うく叫び声を上げそうになった。堪え切ることのできなかつた心の声が漏れ出てしまっていたらしい。

「でっ、出られるなら、早く出て下さい。黙ってるなんて卑怯です」堂々と相手の悪口を口にしてしまった事に対する後ろめたさからか。言い訳を述べようとしたが、上手く口が回らずどもってしまっ

た。
「あのなら、俺だって仕事なんだよ。四六時中携帯を確認して
るわけじゃないんだぞ？」

「そんなことも分からないのか」と、わざとらしく吐かれた溜め息が、ますます愛香の神経を逆撫でする。

——本当は連絡が来ることを電話越しの男は知っていたのだが、彼女が知る由もない。

酸素を求める魚のように口をぱくつかせたが、言いたいことが纏まらず悔しげにグツと奥歯を噛み締めた。

「で、何の用だ？」

物言わぬ自分を綺麗に無視して音弥が問い掛けてきた。瞳を閉じて一息つき、気を取り直してから愛香が答える。

「家主さんの電話番号を教えてください。バイトの内容について、いくつか質問をさせて頂きたいんです」

「質問って何だよ？ 分かりやすく纏めてあったらどう？」

微妙に噛み合わない会話。

ぐるぐると頭の中を駆け巡る得体の知れない嫌な予感。ざわつく心を振り切って、もう一度同じ問いを繰り返した。

「家主さんの電話番号を——」

「今、話してる」

密やかな笑みを含んだ声音が静かに紡いだ言葉に、愛香の目の前は真っ暗になった。受け入れがたい現実に、身体の震えが止まらない。止められない。

「こ……この部屋って」

「俺の部屋だな。当然、雇い主も俺、だ」

——嘘であつて欲しい。その願いは余りにも空しく打ち砕かれてしまった。くすくすと電話越しで悪魔が楽しげに笑っている。

「得意なんだろう？ 書類整理と部屋の掃除」

（絶対、わざとだ！）

——指示された新たな仕事が、『花桜』で自分が受け持っていた仕事の内容に酷似しすぎている。

それこそが『雇い主』の正体に、愛香が気付いてしまった最大の理由であつた。

きつと鈴恵さんが情報源に違いない。彼女に罪はないのだが、本当に彼のことを信用していることが嫌というほど伝わってきて、何故か愛香は悲しくなつた。

（鈴恵さん、騙されてるんじゃないかな……）

弱い者を苛めて楽しんでるような男なのだ。風が吹いたならば崩れそうなほど、ぞんざいに積み上げられている紙束を見つめ、愛香は彼女のことを憂えた。

「この書類つて、一体何なんですか？」

「開発中の試供品の研究データだ」

なんてものを一般人に扱わせるつもりなのか！ 会社の機密事項を漏洩させたとかで、何かあつたらどうするのだろう。考えるだけで恐ろしい。さらにと、とんでもないことを口にした音弥に愛香が喰つてかかつた。

「私、面倒なことに巻き込まれるのは嫌です！」

「どうせ、読んだつて分かんねーだろ。数字を纏めてくれるだけでいいんだよ」

「そ、それは」

確かに意味が分からない。横目で紙束を盗み見た愛香は、不可解なグラフの下に記されていた数式に言葉を失い、言い淀む。何とも痛いところを突かれてしまったようだ。

もともと数学や化学など、一般に理系分野と呼ばれる教科が彼女は得意でない。平均点よりも少々低い位置を行ったり来たりしてい

た高校時代を思い出して、思わず眉を顰めた。

「もう、資料見たんだろう？　今更やらないなんて言わせねーぞ」

「……っ」

一瞬にして冷たさと威圧感を増した音弥の声音に、怯えてしまった愛香は唾を飲む。逃げ道は疾うに塞がれてしまっていたようだ。それでも、言い返すための言葉を探して必死に頭を回転させた。

「初めだから大変だろうが、早く仕事に取り掛かった方がいいんじゃないか？」

「ど、どういことですか？」

——何を考えているの？　急に労わるような口調になった音弥の不自然な優しさ。気味が悪い。狼狽する愛香を、からかうように音弥の声のトーンが若干上がる。

「そりゃあ——」

「神崎さ——ん」

答えようとした音弥の声に重なるように、はっきりと聞こえたのは若い男性の声。彼を呼んでいるらしい。同僚か、はたまた部下か。何ともタイミングが悪い。

ガサガサと紙同士がこすれ合う音と、椅子を引く金具の擦れた音が電話越しに伝わって来た。

「じゃあ、な、期待してる。ああ、ちゃんと裏まで読んだ方がいいと思うぞ」

「ちよつと、待って！」

——ブツッ。

まただ。言いたいことだけ告げ、切られた。こちらのことなど一切考慮なしである。苛立たしげに携帯電話を元の場所へと仕舞い込んだ愛香は、ソファアの上に投げ捨てられた茶封筒を睨みつけた。

——「ちゃんと裏まで読んだ方がいいと思うがな」

無神経で自分勝手な男が残した意味深な言葉。

表だけで綺麗に文章が切れていたの、裏まで説明が続いているとは思ひもなかった。

従つのも癪だが、全体に目を通していないのは自分としても気持ちが悪い。溜め息をついて腕を伸ばし、用紙を掴み裏返した。

「……嘘でしょう」

『勤務時間は原則三時間。午後六時までには部屋を出ること』

慌てて、壁に掛けられた時計の文字盤を見つめる。短針が三と四の間を示していた。

只今、三時三十分。残された時間は、あと二時間三十分しかない。時間がないことを、あの悪魔は知っていたのだ。だから、あんな事を――

この時、冷静さを少しでも取り戻せたならば良かったのかもしれない。何もかも放り出して、出て行けば全ては終わったのに。

（見てなさいよ！）

終わらせることができなかったと泣きつくことなんてしない。絶対に時間内に片付けてみせる。

薄手のシャツの袖口のボタンを外し、勢い良く肘上まで捲り上げながら、愛香は目の前の敵――紙束の塔と向かい合った。

横暴な雇い主との避けられない戦いのゴングが高らかに鳴り響くのを、少女は確かに聞いた気がした。

新しい仕事？（後書き）

少々長くなりましたが、楽しんで頂けましたか？
また、続きでお会いできると嬉しいです（^^）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8535u/>

乙女の涙は悪魔も倒す？

2011年10月11日03時52分発行